



壮大な人間性回復のドラマ - 学校と地域の心のハーモニー -

鳥取県立赤碕高等学校

1. 地域および学校の概要について

鳥取県立赤碕高等学校は、県中部に位置し、南に秀峰大山と船上山を仰ぎ、北に四季折々の日本海を見下ろす豊かな自然に恵まれた環境にある。1学年3学級の普通科高校であるが、昭和38年の創立以来、地元へ根ざした学校、地域に開かれた学校づくりを教育目標の柱とし、地元赤碕町と強い繋がりを堅持した教育活動を実践している。

とりわけ、平成七年度より特色ある学校づくりの一環として、「文理コース」「情報ビジネスコース」「健康スポーツコース」のコース制を持つ普通科高校として生まれ変わった。コース制は、他の学校に見られない独自性と地域社会に誇れる教育内容の確立を目指した導入だったが、中でも際立った特色を持つ「健康スポーツコース」は、導入当初から今日まで熱い注目と期待を集めてきた。

健康スポーツコースでは、「人との関わり方を学ぶ『レクリエーション指導』」を1年生から履修している。「レクリエーション指導」が教育課程に位置づけられたのは全国でも珍しく、本校の教育改革の要であり、生まれ変わった赤碕高校のスクールアイデンティティーを象徴する理念として研究実践し今日に至っている。

2. 「レクリエーション指導」授業の実際

(1) はじめに

不登校、引きこもり、いじめ、いわゆる学級崩壊、少年犯罪、コミュニケーションの低下、自分勝手な振る舞いなど、子どもたちの心の問題は今や社会問題となっている。

私たちは、集団の中で他人と関わり合って育ち、他人と「協働」しながら様々な役割を果たして生活している。従って、人との関わり方が私たちの人生を大きく左右する大切な鍵を握っていると言えるが、今の子どもたちに人間関係を学ぶ場が体系的に提供されているとは言い難い。

その中で、本校では人との関わり方を学ぶ「レクリエーション指導授業（以下、レク授業と略す）」を七年前から実践している。クラス内の生徒同士だけでなく地域に出かけ園児や高齢者施設利用者の方との交流の場を体系的・継続的に与えることで、「人を思いやること」を思い出させたり、そばにいる人から喜ばれ、役に立ったという「役立ち感」を実感として気づかせ、人間としての喜びを育んだり、情緒の安定、人間関係の修復、コミュニケーション能力を高めるなど、豊かな人間性や良好な人間関係を築く一助としている。

(2) 教育課程上の位置づけ

2・3年生は、保健体育の授業の専門科目として2単位、1年生は1単位（地域に出かけるときはLHRの時間と組み合わせ2時間とする）

(3) 授業の内容

「心の教育」の必要性が強く主張されているが、本校が取り組むレク授業は、子ども達に「自分の生き方を考えさせる」ことを中核とし、よりよい人間関係づくりや人との関わりを、レクリエーション活動を通して体験的かつ実感をもって学ばせようとするものである。

この学習は、人間関係の基礎を学ぶ学習と応用編の二つの大きな柱からなり、3年間

にわたり、体系的・継続的に人と関わる学習である。

コミュニケーションワーク（仲間とのふれあいを図るコミュニケーション・ゲームなどで、人とふれあうことの楽しさを体感したり、思いやり、人の話を聴く、挨拶、ホスピタリティなどのあり方を気づきの体験学習で学ぶ）で、他人や集団との望ましい関わり方を学ぶ。

保育所園児や高齢者施設の利用者と1対1の長期交流の中で で学んだことを実践し確認する。

健康スポーツコース（地域交流＝人間関係の応用編）					
	単位	学期	交流先	回数	時間
1年	1	1～3	東伯町立逢東保育園園児との交流	10	20
2年	2	1学期	キングガーデン幼稚園園児との交流	4	8
		2学期	東伯町社会福祉センター利用者との交流 & 赤碓町高齢者運動会支援	7	16
		3学期	東伯町内保育所園児との交流	4	8
3年	2	1学期	赤碓町内保育所園児との交流	8	16
		2学期	高校生と園児のわくわくドキドキ運動会	1	4
		2学期	特別養護老人ホーム百寿苑利用者との交流	5	10

（４）実施に当たり苦労したり、工夫したところ

現在は学校支援委員会ができていますが、八年前にこの取組をスタートしたときは、何をどうしていいかわからない面が多々あった。まずは、地元や隣町の役場にでかけ取組について説明したり、何度も交流先に出向き授業への理解を求めてきた。

毎年、この実践を行うときに考えることは、交流先が高校生の心のリハビリテーション施設ではないということである。何をさておいても、教職員が交流先のことを十分理解したうえで、生徒のプラス面だけでなく交流先の園児や高齢者、施設職員、地域にとってもプラスになるように打合会や連絡等を密にすることが大切である。高齢者施設の一つは、学校のそばにあり授業後施設内で担当者とふりかえりや次週の打ち合わせなども行っている。

また、交流にあたりホスピタリティや挨拶などグループ内での「気づきの体験学習」で、他人や集団とのよい関わりを学んだ上に、服装をはじめ爪などを短く切らせたりしながら交流に臨んだ。交流先での挨拶、靴の整理整頓など繰り返し徹底させた。

さらに、一回一回の交流をより確かなものにするために長期間の交流とし、生徒一人ひとりの毎回の学習記録をまとめ、交流先に生徒の様子を伝えるとともに、交流先からも生徒の関わりについての感想などをいただきながら継続的な学習を行ってきた。

（５）活動の評価方法

毎回の学習記録などの提出物、授業への取組の自己評価

（６）学校支援委員会の組織・運営

学校全体で推進していくという共通理解の上、交流先等の園長、会長など6名に加え本校から4名の職員の10名で構成し、校外の人の意見や感想を聞くために委員会を実施している。

（７）豊かな体験活動推進事業での取組

赤碓町教育委員会に事務局設置（平成14年10月に第1回情報交換会）

1）推進地域 東伯町・赤碓町

2）推進校 東伯町立浦安小学校、東伯町立東伯中学校

赤碓町立赤碓小学校、赤碓町立赤碓中学校、県立赤碓高等学校

3）推進地域としてのねらいや内容の重点

地域の特性を生かし、町の豊かな自然にふれ、農作物を育てることの大切さを学ぶことや、勤労体験に関わることにより、粘り強く物事に取り組む態度を育て、保護者、地域社会、関係機関との連携を深め、地域の中の人と人とのつながりの中で子ども達を育てていく。今後、推進校同士の取組を情報交換しながら、体験活動を推進していく。

(8) レク授業の反響

本校の取組が新聞各紙に数多く掲載され、平成13年2月には、テレビ番組で全国放映され、全国から視察や激励の手紙が相次いだ。また、全国の小児科医にも注目された。

(9) 成果とまとめ

1年生は四月からこのレク授業がスタートしたが、クラスの生徒全員が授業のたびに喜怒哀楽の感情をダイナミックに流し込まれ、大きく心を揺さぶられていることがわかる。2学期までの学習をふりかえる「ふりかえりシート」は、字が丁寧に書かれていて、生徒にとってレク授業が大切なものだったということの証拠だと考える。また、生徒が「自分にとって、レク授業はどんな意味があったのか？」をじっくりとふりかえりながら感想文を書いていることが伝わってくる。「楽しかった」「勉強になった」と書けば、それで終わってしまうのに、何が楽しかったのか、どんなことが勉強になったのかなど、具体的に書いている。また、表現しにくい部分をなんとか言語化しようと努力している様子が伝わってくる。たとえば、



2学期になって園児との交流が楽しくなりました。なぜかなあ？と不思議に思います。それは、自分の気持ちっていうか、考えが変化したんだと思います。園児の前だと、素の自分が見せられるっていうか、なんか園児といると落ち着くっていうか、いつもとは、違う自分が出てくるっていうか、そんな気持ちになります。まだ、半年ほどの学習であるが、一年生の生徒がレク授業を通して実際に何を感じ、何を学んでいるかが見えてくる。それを生徒の感想も入れ以下の8点に分類してみる。

多くの高校生が、自分は大切な存在だと実感するようになっている。

自分なんて必要とされていないと思っていた。人との関わりが苦手だったし、自分が嫌いだ。でも、少し好きになれました。園児と会う前は「嫌われたらどうしよう」など、不安な気持ちでいっぱいでした。でも、園児はすぐに私のことを憶えてくれて、とてもうれしかったです。予想以上に、クラスメイトのよさを発見する生徒が多かった。いつもカッコつけている君が、優しいお兄さんに見えた。普段しゃべらない人はどんな人かわからない。でも、レクを通して、その人がどんな人か見えてきた。

人とうまく関わるためにはどうしたらいいか。体験を通して学んでいる。

相手の気持ちを考えて行動すれば、喜ばれたり、話しかけてくれることがわかった。人との関わりは難しいけど、相手のいい所を見つければ簡単だとわかった

パートナーが泣いてばかりで落ち込んだ。でも、あきらめずに積極的に話しかけたら、笑ってくるようになり、なついてくれた。うれしかった

自分自身の変化を実感している。

内気な自分だったのに、人に話せるようになった。友だちが増えた。

レク授業のある日が楽しみだったし、一番プラスになったのは、人の気持ちを考えるようになったことだと思います。

レク授業のある日は、楽しかったし、一番プラスになったのは、人の気持ちを考えるようになったことだと思います。

人とうまく関わるためにはどうしたらいいか。体験を通して学んでいる。

相手の気持ちを考えて行動すれば、喜ばれたり、話しかけてくれることがわかった。人との関わりは難しいけど、相手のいい所を見つければ簡単だとわかった

パートナーが泣いてばかりで落ち込んだ。でも、あきらめずに積極的に話しかけたら、笑ってくるようになり、なついてくれた。うれしかった

自分自身の変化を実感している。

内気な自分だったのに、人に話せるようになった。友だちが増えた。

レク授業のある日が楽しみだったし、一番プラスになったのは、人の気持ちを考えるようになったことだと思います。

自己理解を深めている。

最初は子どもと遊べるから楽しいと思っていた。でも、今は自分を知るためだと思う。気づかないうちに笑っていたり、優しくしていたり。自分が変わっていくのがわかる。今までは自分が嫌いだったのに。

私がいつのまにか優しくなっていました... 子どもに対して笑顔をもむけることができた。すごい成長ぶりだと思った。

高校生が園児から学んでいる。

思った以上に園児は自分の考えを持っていた。それに、素直で何でも挑戦する気持ちがあるのはスゴイと思った。自分たちには、なかなかできないことなのに...

園児に教えてもらった気がする。

園児からもらうものが多い。自分の接し方がよければ笑顔、ダメなら不機嫌。反応がハッキリしているから、一目瞭然。どうすればいいか、わかる。回を追う毎に交流がよくなった。

高校生が実感する園児と交流する意味。

園児はみんな元気がいい。みんなすごい笑顔で、見ているだけで元気がわいてくる。園児と接していると、自分が少しずつ変わっていく気がする。

園児との交流を通して、心が気持ちよくなった。というか、なんて言えばいいかわからないけど、心が朗らかになった。

反省点

パートナーが騒いでいるのに注意できなかった。仲良くするだけでなく、しかることも大切だと思った。

海に連れて行ったとき、子どもから目を離してしまい、怒られた。子どもの命の大切さ、責任の重さがわかった。

このように上記は、一年生のふりかえりの様子であるが、三年間、体系的・継続的に生徒一人ひとりの心を揺さぶり続けることで、なんととっても生徒達はそばにいる人から喜ばれ、自分が役に立ったという「役立ち感」を肌で感じる。「こんなに自分のことを喜んでくれる人がいる」「自分のいのちってこんなに価値があるのか!」と自分の存在に自信を持ち、自己肯定していく。まさに、「生きていてうれしい」と人間としての基盤である「人間としての喜び」を実感する。当然、自分を好きになり生活にもいきいきと意欲的になり、他人の意見や行動を素直に受け入れていくようになる。

また、学校では見ることがないクラスの仲間の姿にふれ、仲間の良さを発見、再認識していき、自然とクラス内に笑顔と温かい雰囲気生まれる。さらに、園児や高齢者施設の利用者の方と感性を生かして関わることで、誕生のドラマや命の重さを感じていく。

このように、子どもたち本来ののびやかな生命力を取り戻していく取組は、子どもたちの様々な諸問題を解決する一助になる。人間関係づくりが、成長と共に自然に身につけていた時代と違い、今日は、家庭や地域で役立ち感を実感できる場が少なく、教育現場で、できるだけ早期に(保、幼、小から)人間関係づくりの学習が必要である。そのためには、学校と地域連携が必要である。

さらに、生徒が自らの進路を決定する際にも、自分や他人を好きになり命を大切にするという「人間としての基盤」を身につけさせることによって、周囲の人との関わりや他の命を大切にできる社会人が育っていくことを期待したい。